The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	見本はいかにして解釈されるか : 有意性理論による「例示」概念の分析とその射程
Author(s)	能川, 元一
Citation	年報人間科学. 1997, 18, p. 37-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11011
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

見本はいかにして解釈されるか

——有意性理論による「例示」概念の分析とその射程——

能川　元一

キーワード
見本　例示　有意性　カテゴリー　発言解釈

（要旨）
グッドマンによって明らかにされた「例示」という記号作用は、一般に客観主義的な偏見のために見過ごされがちである。しかしながら見本の解釈、特に新奇な見本の解釈は決して自明のプロセスではなく、発言解釈の理論、より一般的には認知の理論にとって重要な問題を構成している。このような、見本が解釈されるプロセスを明らかにするうえで、スペルベルとウィルソンの有意性理論の中心的な洞察は基本的な枠組みを提供する可能性がある。その洞察とはすなわち、発言の解釈者は文脈を拡張することによって発言の有意性を追求する、というものである。それと同時に、例示を独自の記号作用として認めることは、有意性理論の客観主義的なバイアスに基づくいくつかの限界をのりこえることを可能にする。さらに、有意性理論の枠組みに基づく見本解釈のプロセスの素描は、メルロ＝ポンティが「語る発話」と呼び、グッドマンが「世界制作」と名づけた創造的な認知の営みを考えるうえで例示という概念がもつ重要性を示唆していることを論じる。

一　見本のパラドックス

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』における言語論（第一部第四章「表現としての身体と発話」）を「語詞映像説」の批判からはじめているが、そこで援用されているのが色名健忘に関するゴルトシュタインらの研究である。色見本の分類という極めて単純な（しかし抽象的な）作業に失敗する患者にあっては「カテゴリー的態度」が欠落しているとするゴルトシュタインらの分析を、メルロ＝ポンティが「世界内存在」の病理としてとらえ直したことはよく知られている。だがここでは色名健忘という症例のもつ存在論的な示唆について直接考察するのではなく、別の角度からこの症例を見直してみたい。

ここで患者に与えられた課題は、最初に与えられた色見本をモデルとして残りの色見本を分類することである。つまりまず最初に提示されたものが何色の見本であるかを判別し、ついでそれと同じ色の見本であるようなものを集めることが要求されているわけである。ところで、見本を記号の一種として位置づけ、その記号作用に「例示exemplification」という名を与えたのはN・グッドマンの業績であった。グッドマンによれば、例示とは外延指示denotationとは逆の方向性をもつ指示作用である。外延指示、すなわちあるラベル（語、画像など）がそのラベルの事例を指示するという場合、指示の矢はラベルから事例へと向かう。これに対して、例示とは事例からその事例にあてはまるラベルへと向かう指示である。グッドマンの唯名論的な用語法を用いずに言うなら、見本とはそれ自身が所有する特性を指示するような記号である。かくして、赤いプラスチック片はそれがもつ「赤」という特性の（グッドマン本来の語法ではそれにあてはまる「赤い」というラベルの）見本になりうる。

問題は、「例示」が単なる特性の所有ではなくれっきとした記号作用である以上、見本もまた解釈されねばならないというところにある。例えば色見本は「赤」や「青」といった特性だけでなく、長方形であるとかプラスチック製であるとか、これこれの大きさであるといったさまざまな特性をもっている。したがって全く同じものが算数の授業で用いられれば長方形の見本に、クラフトショップで展示されればプラスチック素材の見本になりうる。見本はそれ自体の性質によって直ちになにものかの見本であるのではなく、なにものかの見本として解釈されねばならないのである。

当たり前のことであるが、見本は実物[1]について知る（知らせる）ために用いられる。しかしまさにここに「見本のパラドックス」とでも言うべき事情が存する。というのも見本を見本として認知するためには、それが何の見本であるのかを、つまりはその見本が指示している実物を知っていなければならないからである。[2]我々は色見本を見て直ちにその実物、例えば購入しようとするペンキの色へと思いを馳せる。だがこの時、決定的な一歩がすでに踏み出されているのである。すなわち、赤い――と同時に長方形であり、厚さが1.5㎜であり、プラスチック製でもあり…といった――ものが「赤」

の見本となるプロセスである。問われるべきは色名健忘の患者がなぜ色見本の分類に失敗するかということだけでなく、なぜ健常者はやすやすと分類をやってのけるのかということでもあるのだ。

見本が記号の一種であることがしばしば見過ごされ、見本の意味論がほとんど構想されずにきたのにはもちろん理由がある。色はこれらのプラスチック片がもつ「客観的」な性質であり、それらの色は「客観的」な類似性によって自然に秩序づけられている、とする客観主義、実在論である。こうした「根源的憶見」[3]、「根源的信憑」[4]は我々が世界に向きあう際に出発点とせざるをえないものではあるが、「世界（…）の意味をそれが生まれつつある状態でとらえる」[5]ことを目指すならばのりこえねばならないものである。後にも述べるように、そこでは類似性によって例示という記号作用が成立するのではなく、むしろ例示こそが類似性や知覚世界の秩序をつくり出す、と言わねばならない。[6] すると見本が見本になるプロセス、あるいは見本が見本として解釈されるプロセスが問われるべき問題として浮上してくる。

M・ダグラスは「例示」概念を人類学へと応用することを試みた論文で、なにものかが見本として機能するようになるのはどのようにしてか、という問いをたてている。[7] しかし彼女はこの問いに長くとどまることはない。ダグラスは見本が見本としてはたらくのは「習慣」によるとし、その後は共同体のなかでいかにしてその習慣が学習されるのか、という問いに移ってしまう。[8] なるほど我々が出会う多くの記号は慣習的なものである。色見本を――その名が示す通り――形や素材ではなく他ならぬ色の見本（自らの色を指示する記号）として解釈することは我々の習慣の一部であり、これもまた見本の記号作用が見過ごされがちであることの理由の一つである。そしてちょうどはずみ車のように、見本としての使用が繰り返されることによってこの習慣は強化される。しかしながらこれもまた、最初の決定的な一歩、はずみ車を動かす最初のひと押しがすんでしまった後の議論である。むしろ我々としてはこの習慣が最初に獲得される瞬間、[9] すなわち新奇な見本が解釈される現場へと目を向けねばならない。

新奇な見本とはどのようなものだろうか。まず考えられるのは珍しい生物の標本を同定するようなケースである。この場合、その標本が何らかの種の見本であることはわかっているが、なんの見本であるか（つまりその標本がどのラベルを指示しているのか）はわかっていない。しかしながらこのようなケースでは、前節で述べたような「見本のパラドックス」は全くといってよいほど姿を現わしてはいない。原理的に言えば見本はそれがもつ無数の特性のいずれをも例示しうる。見本を正しく解釈することとは、それがもつ無数の特性のうちどれが指示されているのかを選定することであるが、この選定はサンプリング元の実物についての知識を前提しているように思われる。見本という記号のパラドキシカルな性格はここに存する。これに対して未知の個体を同定する場合、なるほどそれがどの種の見本であるかはわかっていない。しかしながら標本のどのような特徴に注目して同定を進めるべきかは分類学において確立された

習慣的な手続きであり、例示されている特性の選定に困難をきたすことはないと思われるからである。[10]

グッドマンの「世界制作」論の用語でいうならば、新奇な見本とはそれによって世界の新しいヴァージョンversionがつくられることになるような、そうした記号である。ところで、記号のはたらきによって新しい世界が創造されるという局面に強い関心を向けたもう一人の哲学者こそ、メルロ＝ポンティに他ならない。「語る発話parole parlante」を「語られた発話parole parlée」から区別することによっておこなわれる彼の「純粋言語の幻影」（『世界の散文』）批判は、生成しつつある世界をとらえようとする彼の哲学のもくろみをもっとも端的に体現していると言える。[11]

ところで、メルロ＝ポンティの言語哲学の中核にある「語る発話」という概念について論じる際の困難の一つは、個別の発話なり文なりを具体的な分析の対象とするのが難しい、というところにある。というのも既存の言語体系への「首尾一貫した変形」としての「語る発話」とは同時に「実存の転調」[12]でもあって、決して「客観的世界」で生じる第三人称的な出来事ではないからである。それゆえ、「語る発話」と「語られた発話」との区別の目印となる文法的な特徴――例えば言語行為論が分析の手がかりとした「遂行動詞」のような――があるわけではない。『知覚の現象学』において「語る発話」がはたらく場面について言われているのは、例えば「ことばを話すことを学んでいる子どもや、なにごとかを初めて語ったり考えたりするような作家、要するにある沈黙をことばにしようとする全ての人々」[13]といったことに過ぎない。

それゆえ次の一節は、メルロ＝ポンティが具体的なテクストを対象として「語る発話」について論じている稀な例である。

「スタンダールを読む以前から、わたしは悪党とはなんであるかを知っている。だからこそ、スタンダールが検事総長ロッシは悪党であると書くとき、彼が何を言わんとしているのかを理解できる。だが検事総長ロッシが生きはじめると、もはや彼が悪党であるというのではなく、悪党とは検事総長ロッシであるということになるのだ。私はスタンダールが使っている世間一般のことばによって彼の精神に入り込むのだが、これらのことばは彼の手のうちで密やかな捻じれをこうむっているのである。」[14]

我々は以前に、このような事例において生じていることを理解するうえで、N・グッドマンの「例示」概念がきわめて有効であることを指摘した。[15]というのも、ここでは小説中の検事総長ロッシという人物が「悪党」の見本として機能することによって「悪党」というカテゴリーが再編成されているのであり、「悪党」という語が悪党たちを指し示す（「ロッシは悪党である」）といった外延指示のはたらきだけを念頭においていたのではこうした事態を理解できないからである。こうした分析が妥当であるとするなら、我々はここで新奇な見本の解釈という場面に立ち会っていることになる。色見本

とは異なり、そもそもロッシという人物がなにものかの見本であることは我々の習慣の一部ではない。それゆえにまた、彼が何の見本であるのかも習慣によって決められているわけではない。読者（メルロ＝ポンティ）はロッシが悪党の見本であることをはじめて発見し、解釈するのである。通常、見本の解釈がはらむパラドックスは習慣によって回避されている。しかしながら「語る発話」というプロセスに含まれる新奇な見本の認知と解釈とは、まさに新たな習慣の獲得と類比的な現象であり、習慣は助けにならないのである。

二　有意性理論と見本

それでは見本はどのようにして解釈されるのだろうか。グッドマンは記号の使用に関して「正しさrightness」という基準を提唱している。これは大きく分けて二つの要因からなる。一つは経験によってもたらされる記号の「硬性entrenchment」[16]であり、もう一つはその記号を使用することによってもたらされる認知的なメリットである。ただ記号の「正しさ」をめぐるグッドマンの議論は、見本の解釈プロセスを明らかにするという目的からすると次の二点で十分ではない。まず、彼は「正しさ」についての体系的、一般的な定式化を行っておらず、またそうした定式化の可能性について悲観的でさえある。[17]次に、ここで問題となっているのは与えられた記号の「正しさ」がいかにして検討されるかではなく、その記号がいかにして解釈されるかである、という点である。なるほど記号の発信者にとっての課題は記号を正しく用いることであると言える。しかし一般に解釈者としての我々は記号の正しさを検討するのではなく、それを解釈するという態度でその記号に立ち会う。解釈者が記号の正しさを問題にするのは解釈に際して何か不都合が生じた場合であり、そうでない限りこれから解釈しようとする記号が「正しい」ことはさしあたり前提とされているのではないだろうか。

実はこれはスペルベルとウィルソンの有意性理論Relevance Theoryがすでに主張していることである。有意性理論によれば、コミュニケーションにおける発言はそれが最適な有意性optimal relevanceをもつという推定を聞き手に対して伝える。これが「有意性の原理」である。[18]ここで我々が有意性理論に注目する理由は三つある。まず第一に、スペルベルらによればある発言の有意性はそれを解釈するのに要する労力と、解釈の結果得られる認知的な成果（文脈効果contextual effect）とによって測られるが、こうした議論はグッドマンの「正しさ」概念を一般的なかたちで定式化するうえで大きな示唆をもっていると思われる。

また我々は前節でメルロ＝ポンティの言語理論とグッドマンの記号理論が客観主義的な実在論への批判という存在論的な含意をもつことを（簡単にではあるが）指摘しておいた。有意性理論は客観主義的な形而上学に基づく言語についての「標準理論」[19]の成果を引き継ぎながらも、そうした形而上学の克服へと向けた第一歩を踏み出している。発言解釈の一般理論（さらには認知の一般理論）を目指して構想された有意性理論の最大の貢献は、発言の「文脈」をあら

かじめ決まった与件としてではなく、むしろ発言解釈のプロセスそのもののうちでダイナミックに構築されるものとして提示したところにある。したがって第二に、文脈の構築というダイナミックなプロセスを発言解釈過程のうちに想定することにより、新奇な見本の解釈（「語る発話」ないし世界の新たなヴァージョンの制作）といった創造的な営みをよりよく理解する可能性が開かれるように思われるからである。そして第三に、見本についての考察は有意性理論がもついくつかの不備を補うことを可能にしてくれるからである。本節ではまず第三の点について論じておくことにしよう。

まずは見本（の使用）が有意性理論が対象とする「示しと推論によるコミュニケーションostensive-inferential communication」の条件を満たしているのかどうかを確認しておこう。有意性理論によれば、「示しと推論によるコミュニケーション」は次のように定義される。

「示しと推論によるコミュニケーションとは、発信者が次のような事実を発信者と受信者の間で相互的に明白mutually manifestにするような刺戟を生み出すことである。すなわち、発信者はその刺戟により想定assumptionのある集合｛I｝を受信者にとって明白にすることを意図した、という事実を。」[20]

ここで｛I｝を明白にしようとする意図は「情報意図informative intention」、この情報意図を相互的に明白にしようとする意図は「コミュニケーション意図communicative intention」と呼ばれる。

さて例えば色見本を陳列する発信者は商品（ペンキなど）がもつ特性のうちのいくつかについての想定を明白にしたいという情報意図をもち、さらにこの情報意図を（つまりはそれが見本として意図されていることを）相互的に明白にしようとするコミュニケーション意図をもっていると言える。慣習的な見本の場合、このコミュニケーション意図は見本をまさに見本らしく陳列することによって明白にされている。

しかしながら同じことが全ての見本について言えるわけではない。例えば標本の例示作用について考えてみよう。ここには有意性理論が想定するような発信者は存在せず、それゆえ標本には情報意図もコミュニケーション意図もない。また先にあげた「検事総長ロッシ」の事例についても、ロッシという見本の解釈はスタンダールの意図を汲むかたちでなされるとは限らない。[21]にもかかわらず我々は見本を解釈し、そこに意味を見いだしている。また、スペルベルら自身が用いている次のような事例を考えてみよう。

「マリーがピーターに、自分の喉が痛いという事実を知らせようと意図するとしよう。マリーはただピーターにしゃがれ声を聞かせ、そうやって自分の喉が痛いということの顕著で決定的な証拠を提供しさえすればよい。この場合、マリーの意図［情報意図］はピーターがそれに気づこうが気づくまいが充足され得る。」[22]

「これ［＝伝えようとする情報の直接的な証拠を提供すること］はコミュニケーションの一形態とみなされるべきではない。なぜならいかなる事態もさまざまな想定の直接的な証拠を提供するが、必ずしも何らかの興味深い意味でそれらの想定をコミュニケートするわけではないからだ。」[23]

なるほどいかなるものもなにものかの証拠となりうるのはその通りである。しかし一義的にある一つの事実の証拠であるとは限らない。マリーの声は「しゃがれ声」の見本であり、それゆえ彼女の喉が痛いことの証拠であるかもしれないが、同時にロンドン訛りの見本でもあって彼女がロンドン出身者であることの証拠であるかもしれない。むしろグッドマンおよびエルジンも指摘するように[24]、証拠は例示を行う記号の一種なのであり、それ自体として直ちになにものかの証拠であるのではなく、なにものかの証拠として解釈されねばならないのである。ホームズとワトソンとの違いは「客観的世界」の水準にあるのではない。一方は靴についた泥を記号（なにごとかの証拠）として解釈するのに対し、他方はただ靴についた泥としてしか見ないのである。

スペルベルらは例示を固有の記号作用として認めていないため、「証拠を提供」するという事例には説明すべきことが何もないかのように論じているが、決してそうではないのである。ではこのようなケースと、コミュニケーション意図が相互的に明白になっているケースとでは解釈のプロセスが大きく異るのであろうか。

異らない、というのが我々の立場である。この点を明らかにするために、有意性理論の枠組みのなかでコミュニケーション意図にどのような意味が与えられているのかを考えてみよう。スペルベルらは有意性理論が人間の認知活動に関する一般理論の基礎になり得るという自負をもつ一方で、分析の対象を二重に絞りこんでいる。まず彼らが扱うのは発言解釈のようなほぼリアルタイムで行われるプロセスだけであり（これによって科学理論の構築といった活動は研究対象から除外される）、さらにそのうちでも彼らによるコミュニケーションの定義にあてはまるものだけである。いま我々が問題にしているコミュニケーション意図が関わるのは、もちろん後者の限定である。コミュニケーション意図の有無によってコミュニケーションと単なる情報伝達（解釈者の側から言えば単なる記号の解釈）とが区別され、前者だけが研究対象とされるのである。問題はこのような区別が必要かつ妥当なものであるのか、という点にある。

スペルベルらは発言解釈過程がより一般的な思考過程に比べて理論化しやすい理由として、情報源（話者）が協力的であることをあげている[25]。コミュニケーション意図の表明とはこの協力的な態度の表明であるわけだ。解釈者の側から言えば、これは結局解釈者が発話の有意性をあてにできる、つまり「有意性の原理」が成立していることを前提できる、ということを意味する。しかしながら、コミュニケーションにおいても有意性は決して保証されているわけではない。話者は単に有意性の推定を行い、それに基づいて発言を解釈するに過ぎないのである。スペルベルらが構想した発言解釈モデル

によれば、聞き手はまず最小限の文脈において発言の文脈含意を調査し、その文脈において十分な有意性が達成されなかった場合にワンステップづつ文脈を拡張し、十分な有意性が達成された時点で処理を終了する。このうち「有意性の原理」やコミュニケーション意図の認知が関わるのは余計な労力をかけてまで文脈を拡張する動機に過ぎない。したがって文脈を拡張して文脈含意を追求することによって解釈プロセスが進むという彼らの中心的な洞察は、コミュニケーション意図の有無という要因に依存していないのである。[26]

スペルベルらが証拠の解釈を自明の事柄として等閑視してしまったのは、彼らの理論構成における客観主義の残滓のなせる業ではないかと考えられる（本稿第1節参照）。同じことは有意性理論における「記述description」と「解釈interpretation」との区別についても言うことができる。この点については以前に論じたので、[27]ここでは若干の論点を補足するにとどめたい。

スペルベルらによれば解釈とは「類似性」に基づく指示の一種であり、特に命題形式の類似性に基づく指示を指す、とされている。しかしやはりグッドマンが教えているように、類似性（ないし特性の共有）は指示の十分条件ではないし、場合によっては必要条件ですらない。また外延指示と例示とを指示の二つの基本形態として認めた場合、解釈がどちらにあたるのかがきわめて曖昧であることも問題となる。有意性理論によれば全ての発言（厳密に言えば発言の命題形式）はまずもって話者の思想の「解釈」であるとされ、メタファーやアイロニーについての有意性理論による分析はこの〝思想の解釈としての発言〟という発想に基づいている。それゆえ、外延指示と例示の区別のうえに立って、解釈という概念を検討し直すことも必要になってくるであろう。[28]

三　新奇な見本の解釈——素描の試み

ここでようやく我々は新奇な見本の問題に立ち戻る準備ができた。有意性理論の中心的な洞察は、見本の解釈という問題についても示唆をもつと思われる。以下ではこの点についての素描を試みたい。

まずスペルベルらが用いた文例に若干の変更を加えた次のケースをみてみよう。マリーとピーターのふたりはフランスを旅行中に宿で盗難にあい、マリーが宿の主人に苦情を言いにいった。

(1-a)　Peter: And what did the inn-keeper say?
（で、宿の主人は何て言ってた？）
Mary: Je l'ai cherché partout!
（あらゆる所を探しましたよ。）

(1-b)　Peter: And what did the inn-keeper say?
Mary: I looked for it everywhere.

(1-a)におけるマリーの発言と(1-b)におけるマリーの発言とは、有意性理論によれば同じ命題形式をもつ。しかしながら英語を母語

とする（と想定しておく）ピーターにとって、(1-a)におけるマリーの返答は余分な処理労力を要求する。したがって有意性理論の枠組みによれば、(1-a)におけるマリーの発言は(1-b)におけるマリーの発言よりも多くの文脈効果をもたねばならない。ここで'Je l'ai cherché partout!'がその命題形式以外にもいくつかの特性をもつことがこの追加分の文脈効果を理解するカギとなる。すなわち、この発言はフランス語の事例であり、それゆえ「フランス語」であるという特性を例示しうる。ここでピーターが文脈を拡張するなら（例えば「マリーと宿の主人は英語で話したかフランス語で話したかのいずれかである」といった想定を加える）、(1-a)におけるマリーの発言は「マリーと宿の主人はフランス語で話した」といった文脈効果をもつことになり、さらに場合によっては、フランス語が不得手であるために宿の主人と談判するのをためらったピーターへの当てつけといった効果をもつかもしれない。[29] このような例示のはたらきは色見本の場合ほど習慣的なものではないが、(1-a)におけるマリーの発言が有意性をもつものとして解釈されるために要請されるものである。

さらに第一節でとりあげた「検事総長ロッシ」のケースを考えてみよう。ロッシなる人物に悪党という特性が付与されている（「悪党」というラベルによって外延指示されている）[30] ことは作品のそれ以降の部分を読む際の潜在的な文脈の一部をなす。ロッシについてのそれ以降の記述が「ロッシは悪党である」という想定に矛盾しない限り、この想定は顕在的な文脈として呼び起こされないまま背景にとどまるか、あるいは新たな記述によって強化されたり、それとの組合わせによって新たな文脈含意を生むといった文脈効果をもたらすかもしれない。しかしながら、もし「ロッシは悪党である」という想定と対立するような記述が現れた場合、読者は「ロッシは悪党である」という想定を含む文脈を構築してその新しい記述の有意性を探ることになる。[31] 読者にはまず新しい記述を偽である（小説の世界の中では）として斥けこの記述は有意性をもたないと結論するか、逆に「ロッシは悪党である」という想定を否定することによって新しい記述に有意性を認める、という可能性が開かれている。しかしながらそのいずれをも選ばない場合、読者はさらに文脈を拡張して解釈を試みることになる。そして例えば、「悪党」についてのステレオタイプ的な知識と「ロッシは悪党である」という想定との組合わせからすでに導出されていた文脈含意を否定することによって、問題の新しい記述は有意性を達成することができる。注目すべきは、このような文脈の拡張による有意性の追求が、「悪党」についてのステレオタイプ的な知識の見直しをひきおこす、という点である。しかもこの見直しはロッシという悪党の事例、すなわち見本に基づいてなされている。もし「悪党」についてのステレオタイプ的な知識が更新されたならば、それにともなって「悪党」というラベルの適用可能性にも変化がみられる（それまで「悪党」とされてきた事例がもはやそうではなくなったり、それまで「悪党」というラベルを適用されなかった事例に適用されるようになる、など）ことが予想される。そうなれば「悪党」というラベルを含む図式ない

し体系[32]の全体が再編成されることになり、世界の新たなヴァージョンがつくられることになるのである。

以上はきわめておおざっぱな素描に過ぎないが、有意性理論の発想が――それが抱えているいくつかの問題点にも関わらず――記号の解釈という過程を一般的に理解するうえで大きな示唆をもつことは示すことができた、と言ってよかろう。さらに、以上のような方向に沿って見本の解釈過程を考えるなら、「例示」という概念のもつ射程の広さに我々は改めて気づかされる。これまでのところ我々は、メルロ＝ポンティが「語る発話」について論じるために提示した「検事総長ロッシ」の事例に例示という記号作用が関与しているという前提に立って論じてきた。では「語る発話」にとって例示の関与はどれほど本質的なものなのであろうか。本稿で試みた素描は、既存の言語体系を再編成し世界を再創造するという「語る発話」の側面に関する限り、例示という記号作用がきわめて重要な役割を果たしていることを示唆していると言えよう。[33]

注

(1) もちろん見本が「偽物」であるという意味ではない。標本の場合であればその標本のサンプリング元、母集団のことである。見本によって指示されているものに対する適切な総称が見あたらないので、さしあたりこう呼んでおく。

(2) 例えば水質検査のためのサンプルについても同じことは言える。なるほどこの場合、サンプリング元の水質は未知である。しかしながら検査の際にはその試料が何の見本として扱われるのか――例えば酸性度、塩分濃度など――は決まっている。これはつまり、調査対象の水がもちうる特性についての明確な予想がすでにあることを意味している。河川の水質について何を調べるのかもわからぬまま検査を行うことはない。

(3) Merleau-Ponty, M., *Phénoménologie de la Perception*, p.408.

(4) *Ibid.*, p.66.

(5) *Ibid.*, p.xvi. グッドマンの「世界制作」論もまた同じもくろみを共有していると考えることができる。

(6) Douglas, M., 'Rightness of Categories', pp.247-248.

(7) *Ibid.*, p.248.

(8) *Ibid.*, p.247, p.257. もちろんダグラスのこの指摘が無意味だということではない。メルロ＝ポンティは「語る発話」を新たな習慣の獲得と類比的な現象としてとらえている（次の注（9）を参照）。しかしかつて拙稿（能川元一、「メルロ＝ポンティの身体論と理性概念の再構築」）でも指摘したように、「語る発話」の成果が共同体のなかで共有され新たな言語的伝統となることを理解するためには、個人における習慣の獲得を越えた論理が必要となるからである。

(9) Cf. Merleau-Ponty, M., *Phénoménologie de la Perception*, p.214.

(10) ただし調査の結果その個体が全くの新種、特に従来の分類学的カテゴリーを大きく揺るがすようなものであった場合には、もちろん話しは別である。この点については本稿第三節で関連した議論を行う。

(11) ただしグッドマンにあってもメルロ＝ポンティにあっても、厳密に言えば世界は創造されるのではなく再創造される。この点は彼らの客観主義的実在論批判を、観念論や相対主義と区別する重要

な点である。

(12) Merleau-Ponty, M., *Phénoménologie de la Perception*, p.176.

(13) *Ibid.*, p.214

(14) Merleau-Ponty, M., *La Prose du Monde*, p.19.

(15) 能川元一、「理解における「創意の論理」—メルロ＝ポンティの「語る発話」概念による」、二六六—二六七頁。

(16) 「硬性」というのはentrenched clauseの訳語である「硬性条項」から採ったものである。「硬性条項」とは「改正には特別の要件が定められている憲法条項」を指す（以上、研究社『リーダーズ＋プラス』英和辞典による）。硬性とは繰返し用いられた記号（がもたらすカテゴリー化）が新奇な、実績のない記号（がもたらすカテゴリー化）よりも優先される、ということである。例えばグッドマンの発明になる有名な「グルー」という語が「グリーン」に比べて〝不自然な〟ものに思われるのは、後者と違って前者が硬性をもたないからだとされる。しかし実績をもつ記号の用法も不可侵というわけではなく、十分な理由があれば新奇な記号がとって代わることもある。このような事情が右記の「硬性条項」の定義と共通点をもつため、いかにもこなれない訳語であるがこのように訳してみた。

(17) Cf., Goodman, N., and Elgin, C.Z., *Reconceptions in Philosophy and other Arts and Sciences*, p.48. もっとも、「正しさ」概念を提唱する以前の、「投射可能性projectibility」に関する議論はある程度の一般化を目指しているものと考えることができる。Cf., Goodman, N., *Fact, Fiction, and Forecast*, chap.IV.

(18) Sperber, D., and Wilson, D., *Relevance*, p.158.

(19) Cf., Nolan, R., *Cognitive Practices; Human Language & Human Knowledge*, chap.1.

(20) Sperber, D., and Wilson, D., *Relevance*, p.63.

(21) Anne Reboulは有意性理論を小説などのフィクションの言語に応用することを試みているが、このような試みにとって有意性理論が発信者の意図（の認知）に大きな役割を与えていることは足枷となってしまう。現にReboulは情報意図、コミュニケーション意図といった論点にはほとんど言及していない。

(22) Sperber, D., and Wilson, D., *op.cit.*, p.22. また［　］内は引用者（以下同じ）。

(23) *Ibid.*, p.23.

(24) Goodman, N., and Elgin, C.Z., *op.cit.*, p.20.

(25) Sperber, D., and Wilson, D., *op.cit.*, p.67.

(26) もう少し積極的な言い方をすれば、人間とはいわば意味に憑かれた存在である。枯れ尾花が幽霊に見えるのもそのために他ならない。この意味でも、コミュニケーション意図が有意性理論のなかで果たすべき役割はほとんどないのではないか、と考えられる。スペルベルらのもくろみ通り有意性理論をコミュニケーション理論から認知についての一般理論へと育ててゆくためには、コミュニケーション意図という概念はその必要性、妥当性を厳しく吟味されるべきであろう。

(27) 能川元一、「有意性理論における「記述」と「解釈」—言語的コミュニケーションの非言語的側面—」、第3節。

(28) 例えば発言の命題形式は話者の思想を外延指示するのか、それとも例示するのか、という問題がある。なおアイロニーの場合、発言はまず話者の思想の解釈であり、次にこの思想が他のだれかの思想（自嘲の場合は自分の別の思想ということになろう）の解釈である、とされている。しかしながら解釈者の視点に立つなら、アイロニカルな発言はまずアイロニーの対象となっているだれか

の思想の解釈であり、そのだれかの思想の解釈として話者の思想が理解される、と考えるべきであろう。

(29) もちろん、'Je l'ai cherché partout!' という発言がもつさまざまな特性のうちなぜフランス語であるという特性がピックアップされるのか、という問題は残る。次にとりあげる「検事総長ロッシ」の事例からも予想されることであるが、インフォーマルなかたちで言えば処理労力を増加させるような要因には解釈者の注意が特に向けられる、と想定することはそれほど無理なことではなかろう。

ところで、有意性理論においては発言の命題内容が話者の思想の解釈であるとされていることに先ほど言及したが、発言とその命題内容との関係はどのようなものなのであろうか。この点を明らかにするには言語的なコードの本性について立ち入った考察が必要であり、現時点ではその準備がないため今後の課題とせざるを得ない。ただ、(1-a) のように発言の命題形式と非言語的特性の例示とが協同しているケースが存在することを考えるなら、発言とその命題形式との関係を例示のそれとしてとらえることにより、そのような事例に一貫した分析を与える可能性が開けるのではないか、とも思われる。

(30) もちろん厳密に言えば虚構の人物であるロッシを外延指示することはできない。グッドマンは虚構の対象への指示という問題についても考察しているが（Cf., Goodman, N., and Elgin, C.Z., *op.cit.*, chap.V.）、ここではそこに立ち入ることは避け、とりあえずこのように言っておく。

(31) 本稿執筆中に、拙稿「理解における「創意の論理」—メルロ＝ポンティの「語る発話」概念による」に関して伊藤泰雄氏よりこの点に関連するコメントをいただいた。この場を借りて改めてお礼を申し上げる。

(32) 「図式」および「体系」については、Goodman, N., and Elgin, C.Z., *op.cit.*, p7.を参照。

(33) この点に関しては、分類学の歴史において新種の生物の発見（ないし少なくとも既知の標本の新たな解釈）が、それまでの分類学的カテゴリーの更新にどのように結びついたかを検討することが有益かもしれない。なお、ダグラスは例示が外延指示よりも直接的immediateな指示の形態であり、もっとも基礎的なレベルの分類（クラス分け）から派生するという仮説をたてている（Douglas, M., 'Rightness of Categories', pp.247-248.）

主要参考文献

Douglas, M., 'Rightness of Categories', in Douglas, M. and Hull, D. (eds.), *How Classification Works: Nelson Goodman among the Social Sciences*, 1992, Edinburgh University Press.

Goodman, N., *Languages of art*, 1976, Hackett Publishing.

Goodman, N., *Fact, Fiction, and Forecast* (4th ed.), 1983, Harvard University Press.

Goodman, N., *Of Mind and other matters*, 1984, Harvard University Press.

グッドマン（菅野盾樹・中村雅之訳）、『世界制作の方法』、一九八七年、みすず書房。

Goodman, N., and Elgin, C.Z., *Reconceptions in Philosophy and other Arts and Sciences*, 1991, Hackett Publishing.

能川元一、「メルロ＝ポンティの身体論と理性概念の再構築」、『年報人間科学』第十三号、一九九二年、五五－六九頁

能川元一、「有意性理論における「記述」と「解釈」—言語的コミュニケー

ションの非言語的側面―」、『年報人間科学』第十五号、一九九四年、五三―六六頁
能川元一、「理解における「創意の論理」―メルロ＝ポンティの「語る発話」概念による」、『哲学』第四五号、一九九五年、二六三―二七二頁
Nolan, R., *Cognitive Practices; Human Language & Human Knowledge*, 1994, Blackwell.
Merleau-Ponty, M., *Phénoménologie de la pcapital*, 1945, Gallimard.
Merleau-Ponty, M., *La Prose du mcapital*, 1969, Gallimard.
Reboul, A., *Rhétorique et stylistique de la fiction*, 1992, Press Universitaires de Nancy.
Sperber, D., and Wilson, D., *Relevance: Communication and Cognition*, 1986, Harvard University Press.
Sperber, D., and Wilson, D., 'Loose talk', *Proceedings of the Aristotelian Society*, NS LXXXVI, 1986, pp.153-71.
菅野盾樹、「表現を理解するとはどういうことか（三）――いのちのリプレゼンテーション」、『iichiko』、№三四、一九九五年、一一四―一二五頁。

How are exemplars interpreted? —Relevance-Theory-based analysis on 'exemplification' and its philosophical implications

NOGAWA Motokazu

How are exemplars interpreted? We cannot treat interpretation-process of an exemplar (especially of a novel one) as something self-evident. This problem is very crucial to the theory of utterance-comprehension, and more generally, to the theory of human cognition, although reference by exemplars (exemplification, as N.Goodman named) is often neglected by objectivist-realistic theorists. Relevance Theory (Sperber & Wilson) offers a basic framework for explaining the process of exemplar-interpretation: we can analyse exemplar-intepretaion as a pursuit of relevance by extending given, initial context. In return, the notion of exemplification, recognized as a basic kind of non-denotative reference, permits us to modify Relevance Theory and to overcome some of its defects which results from its objectivist inclinaiton (for exemple, its dubious distinction between *communicating* one's informative intention and providing a direct evidence for the information to be conveyed, or its notion of "interpretation" as opposed to "description"). And Relevance-Theory-based analysis on 'exemplification' may reveal an important ontological-epistemological implication of this notion: recognition and interpretation of novel exemplars are playing an central part in the creative cognitive pracitces, the re-organizing of exsiting categories, like "parole parlante" (M.Merleau-Ponty) or "world-making" (Goodman).

Key Words

exemplar; exemplification; relevance; category; utterance comprehension